

フィンランド図書館研修参加報告書

獨協大学図書館 菊田裕子

1. はじめに
2. フィンランドの概要
3. 訪問見学概要
4. フィンランドの教育
5. フィンランドの図書館
6. おわりに

1. はじめに

夏季休暇を利用し、フィンランド図書館研修に参加することが叶った。2027年度に本学現図書館設立20周年を記念して図書館のリニューアルが行われることが決まり、そのリニューアルキーワードの1つに「森」というものがあるため、今回の訪問先のフィンランドが森の国と言われていることもあり、研修に参加することで何か参考にできることはないかと考えた。また、自分が担当している業務で電子資料に触れる機会が多く、海外の電子資料の普及に興味があったため、研修へ参加することを決めた。そして幸運なことに、同僚と参加することができたため、研修中は意見を取り交わし、お互いの気づきを共有することができたのは非常に有意義で理解が深まった。上記の理由で参加するに至ったが、あまりにも日本とフィンランドの事情が異なったため、記録も兼ねてフィンランドの事情を多めに書きつつ、図書館について報告したい。まずはフィンランドの基本情報から確認し、理解を深めていきたいと思う。今回の図書館研修の訪問先については別紙参照されたい。

2. フィンランドの概要

フィンランドは正式にはフィンランド共和国であり、ヨーロッパの最も東側に位置している。面積は日本よりもやや小さいくらいであり、国土の約7割を森に覆われ、18万以上の湖がある。環境保全の意識が高く、SDGsの達成度ランキングでは2021年から5年連続で1位を獲得し続けている。

国の歴史としては12世紀からスウェーデンの統治下に置かれ、1809年にスウェーデンとロシアの間でフィンランド戦争が起こり、その戦争の結果、1917年のロシア革命によって帝政ロシアが崩壊するまでロシアに占領された。その年の12月に独立し、フィンランド共

和国となった歴史がある。国としては若い方である。1955年に国連と北欧評議会、1989年に欧州評議会、1995年にはEUに加盟した。2023年にはロシアのウクライナ侵攻を受け、NATOへ加入した。このような歴史があり、公用語はフィンランド語とスウェーデン語となっている。

図書館に関わることとしては書籍についてである。書籍は高価であり、贈り物の代表格になるほどである。そして書店での価格はそれぞれの書店に采配が委ねられ、同じ書籍でも書店によって販売価格が異なる。書籍が高価であることが図書館発展の要因の一つではないかと推測される。そして、図書館に所蔵された資料の貸出回数によって著者へ支払われる公貸権が採用され、著者へ還元されているということもあり、著者が図書館でのイベントへ積極的に参加してくれるため、お互いに良い関係を築けていることは非常に興味深い。

3. 訪問見学概要

訪問先はフィンランドのヘルシンキ市内と近郊の公共図書館、大学図書館、小学校、書店であった。どの訪問先でも歓迎してくれ、丁寧な対応を受けた。西と南ヨーロッパの国へ行った経験があり、どの国でも差別を受けたのだが、フィンランドではほとんど差別を感じることがなく、非常に過ごしやすかった。それぞれの訪問先では実際に勤務している方から直接お話を伺うことができた。また、優秀な通訳の方のお陰で、その場で質問もでき、更には研修参加者のそれぞれの専門分野の観点からの質問もあり、多角的に理解を深めることができた。

4. フィンランドの教育

日本とフィンランドの図書館の違いを理解しやすくするために教育についても軽く触れておきたい。大学までの授業料は無償で、高校までは義務教育となり、教材費と給食費も無料である。かつて電子教科書が話題になったフィンランドであるが、現在は基本的に紙の教科書に戻っている。補助的に電子教科書や電子教材を使い、臨機応変に授業を行っているとのことであった。最近は世界情勢があまりよくないせいか、移民が増えていることがあり、学校に通う生徒の中にもフィンランド語を母国語にできていない子供が増えている。国として教育の機会を平等に与える考えが強いため、フィンランド語をしっかりと学んだ上で、通常の授業へ参加できるようにサポート体制がしっかりとしていることは非常に興味深い。しかしながら、最近はフィンランド語を母国語にできていない生徒が多くなり、対応が難しくなりつつあるという問題も起きている。学校は公立がほとんどであるが、日本のように教員の頻繁な異動がない。例えば自分自身の今後のキャリアのために校長職へ応募し、他校で採用されれば異動するということはあるが、希望しない限り同じ学校に勤めることができる。同

じ学校で勤められることは安定した教育を子どもたちに提供でき、学校環境のことも知り尽くしているため、メリットのほうが多いと考えられるのでいいことだと思った。

大学については日本の大学とは違い、専門分野に特化した授業が行われ、様々な年齢の方が学びに来ている。日本のように高校卒業後にエスカレーター式に進む必要があるとは考えていないのでなく、社会に出た後に学びを求めて大学進学を選択する方も少なくない。大学の種類には応用科学大学というものがあり、こちらは職業に特化した専門知識を学び、即戦力として働けるように学べる大学である。大学数は少ないため、入学倍率は非常に高い。このような実態から大学で学ぶ姿勢が日本の学生とは大きく違うような気がした。実際に、ヘルシンキ大学とアルト大学へ訪問した際、学生達の様子を見てみると勉学に励む姿勢が真面目であり、活発な議論をしている姿を多く見かけた。

5. フィンランドの図書館

フィンランド国立図書館は日本の国立国会図書館と違い、資料の館外貸出が可能であるため、公共図書館の性質も持ち合わせている。研究に寄与している面もあり、研究者のみが使用できるエリアを設けている。というのも、歴史ある建物であり、美しい内装であるため、人気観光地となっており、観光客が非常に多く、研究者の研究の妨げにならないように配慮する必要があることが大きい。

国立図書館の大きな役割の一つとして、国内の図書館やアーカイブズ、博物館へオープンアクセスサービスを提供している。Finna.fi（メインのデータセット）、E-library（公共図書館と協力して提供している電子書籍、オーディオブック、デジタル雑誌の貸出サービス）、FinELib（コンソーシアム）、Finto.fi（相互運用可能なシーソラス、オントロジーのオープンサービス）、Melinda（フィンランドの図書館が図書館資料を見つけやすくするための共有データベース）、Publication archive service（出版物アーカイブ、学術出版プラットホーム）である。日本では各機関に委ねられているものが一か所で管理されており、国力の高さを感じた。

こちらには貴重な資料が多くあり、隨時デジタル化を進めている。というのもSDGsの考えが大きく、デジタル化を進めることで、カーボンニュートラル達成に近づくということである。全職員に対して、SDGsに関する研修を行い、他人ごとではなく、自分事として環境について考えるようにしていることは日本とは大きく違った。そして、誰もがインターネット上で資料にアクセスできることによって利用者の研究促進への協力体制を築いている。

学校図書館については、近隣の公共図書館を学校の図書館代わりに使用しているため、併設していることはほとんどないという。授業の一環で公共図書館へ行っているということも

あり、幼年期より図書館教育が行われている。つまり、公共図書館は教育施設である学校図書館の役割を担っている。

公共図書館は学校図書館と従来の図書館機能に加え、体験を提供する場になっており、多くの利用者で賑わっている。今回見てきた公共図書館では音楽スタジオ、動画編集スタジオ、キッチン、3Dプリンタや大型印刷機、電動のこぎりやミシンなどの何かを作り出すための機材が豊富にあり、ただ資料を読むだけの場ではなくなっていた。材料費のみ徴収し、機材利用料や場所代のようなものは発生していない。材料の持ち込みも可能なため、創作活動が盛んな印象を受けた。もちろん図書資料の貸出も多く、ヘルシンキ中央図書館Oodiでは書架にあるはずの1万冊が常に稼働している状態であり、書架にも余裕が見られるくらいであったため、非常に読書が盛んであることが分かる。紙の本を好んで読む利用者が多く、各自治体の公共図書館の電子資料の購入はほとんどないが、国が提供する電子資料サービスを登録利用者は使用することができることであった。

各公共図書館にカラーはあるが、行政の機能が付随していることが多い。特に青少年向けのエリアを設けることがあり、学校が終わる頃の夕方から自治体の職員によって運営がされていることが特徴的である。教育のところでも述べたが、フィンランドは移民が多いという事情があり、フィンランド語を母国語としない大人向けの生活支援サービスや語学教室のようなイベントを自治体職員が図書館内で行っていることが多い。最近ではその語学対策の趣旨が少し入り始めたイベントの「読書犬」について紹介したい。

「読書犬」（Reading Dog）は10年以前から行われているイベントであり、否定も肯定もしないで静かに聞いてくれる犬に対して本（絵本）を読み、自分のペースで言葉を発することができるというものである。人に対しての読み聞かせでは得られない安心感が得られるということである。現在は児童コーナーで開催しており、予約が必要な時は予約が埋まり、予約が必要ではない時は人が自然と集まつくるほどの人気イベントとのことであった。そして、フィンランド語で話すことに自信が持てない移民の子どもたちの発音練習の場にもなりつつあるという。フィンランド語を母国語としない方向けでもあるため、児童コーナー以外での開催も考えていきたいということであった。

研修時間外ではあったが、見学許可をもらい、実際に読書犬に会いに行った。訓練された犬であることと、飼い主であるハンドラーと一緒にいるため安心感があった。犬に対して読み聞かせするだけでなく、犬と触れ合うという経験ができるのは犬好きからすると非常に癒やされた。調べてみると、読書犬というもののセラピー犬としての役割が大きいことが分かった。日本国内の図書館でも拡がり始めている。日本では補助犬以外の犬と一緒に入館することはできないが、フィンランドでは利用者が多いOodi以外のほとんどの公共図書館で犬が入館できる。というのも、公共交通機関や様々なお店に犬と入ることができることから、

犬の入館に対しての反対意見も出てきておらず、大きな問題も起きていないとのことであった。現在は犬の他に猫・ウサギなどが活躍している。

大学図書館のほとんどは大学が国立（公立）であることも関係しているのか、学生以外の市民も一部区域を除いて図書館を利用することができる点は特徴的である。恐らく、幼少期より図書館教育が十分にされているため、日本とは違って問題が起きにくいと考える。

資料については公共図書館とは異なり、電子資料を提供する点が多くなった。紙資料の貸出数が大幅に減ったこともあり、カリキュラムが終了した資料は保存図書館に寄贈したり、不要なものは処分したりするなどした。除籍についての基準は特に規定していないとのことであったが、貸出が全くないものや、情報が古いものを優先的に除籍していると聞いた。その結果、書架の空きが多くなり、書架を撤去して座席と机を増やしたりするなど、図書館は紙資料の貸出の場として存在を求められておらず、場所としてのニーズが高まっていることであった。資料処分や館内改装などを迅速に行うことができているのは、大学から図書館の自治を任せられ、図書館内で素早く判断ができるからとのことであった。

訪問したヘルシンキ大学もアアルト大学も資料費のうち、約8割に近い予算が電子資料またはデータベースに使われ、残りの1割ほどが紙媒体の資料の収集という現状であった。アアルト大学では2012年に3大学が統合されたことにより、図書館も一つになった。この際、大幅なリニューアルを行い、図書館という名前ではなく、2015年にラーニングセンターという名前で開館した。ヘルシンキ大学も今年の夏に図書館の横にラーニングセンターができ、自由に勉強する場所が増えている。両大学のラーニングセンターは学生の意見を取り入れてリニューアルしたことなので、今の学生の求めることがリニューアルで表現されていると思うと興味深かった。

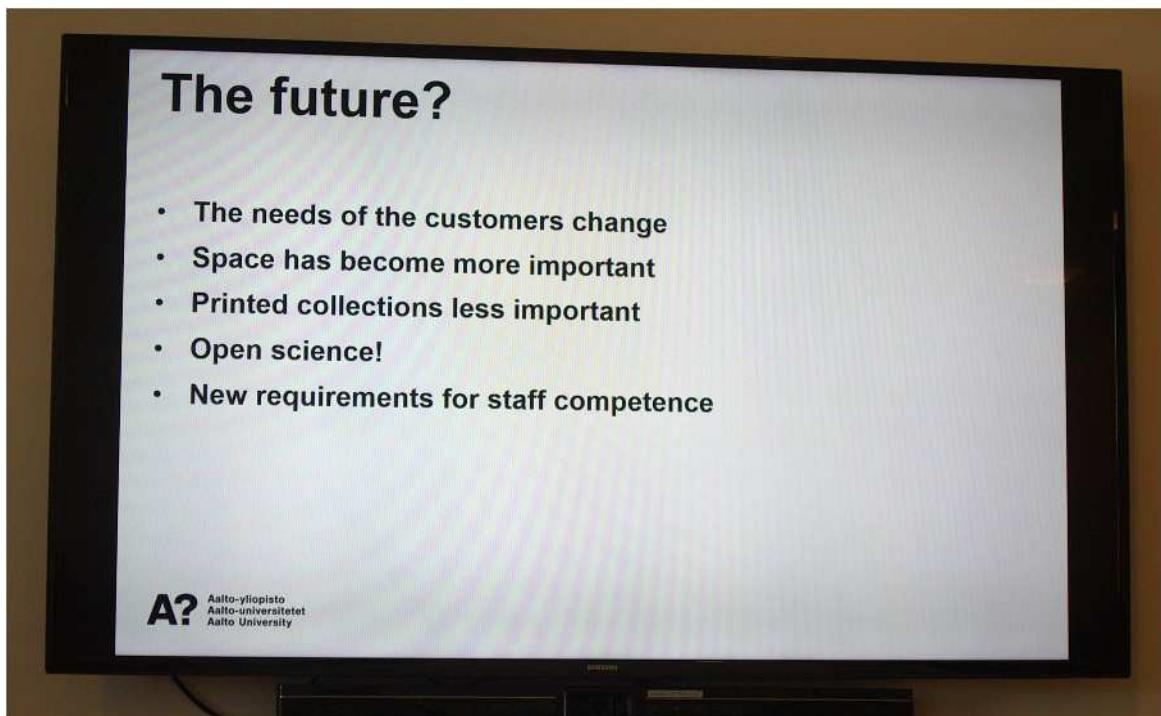
図書館の運営形態について、全ての図書館は独立した組織となっており、各館ごとに予算の使い方を決める点が特徴的であるため、物事に迅速に対応できている印象を受けた。また、採用権も委ねられているため、その時に必要な人材の確保も容易である。そして最も驚いたことは、雇用形態は正規職員だけであるということである。コロナ禍で図書館が休館していた時は、図書館によっては休館中に職員が解雇されるという事態が起きたそうだが、正規職員として働くことは安心感を持って生活ができる、仕事へのモチベーションも自然と上がり、職員の専門性も高まり、利用者へ質の良いサービス提供ができているのではないかと思った。しかしながら、フィンランドも様々な要因から失業率が上がってきてていることがあり、今後はどのようにしていくかは分からぬが、教育に力を入れている国なので教育施設である図書館職員の非常勤化は進むことはないと考えられるのではないかと思う。

6. おわりに

フィンランドの図書館は国が主体となってネットワークが構築されているため、日本に比べて国民へ教育の機会が平等に提供されていることを強く感じた。というのも、フィンランドではほとんどの商品に25.5%（食料品14%、薬と本10%）の税が課せられおり、日本に比べて高い税率であるが、それらの税金が授業料の無償化を実現させていたり、図書館運営から見ても上手く社会に還元されていたりすることが外国人の私ですら実感することができたからだ。そして国力の源は教育に繋がっていると感じた。GDPだけで国力を図ることはできないが、日本よりフィンランドの方が上位であることは事実である。

日本もフィンランドのように図書館が教育の中核を担い、人々の学びの場の中心になったら良いと感じた。しかし、日本では図書館職員の非正規職員化が進んでいることや、数年毎の異動があることを考えると、利用者への安定したサービス提供ができなくなっていると考えられるので、現実は厳しい。これから私立大学は、図書館と情報センター、研究支援の部署が異動なく専門職員として協働していった場合、大学力が自然と高まり、生き残っていくのではないかと個人的に考えている。そして、自分たちで補えない部分を他大学と協力する体制が築ければ、学生たちの学びの選択肢が拡がって、学修が進むと思う。

今回の図書館研修旅行は「図書館」という言葉が入っていたが、図書館のことだけでなく様々なことを考えることができ、非常に学びを得られた研修旅行であった。大学事情や日本の学術情報に関する技術の遅れを考えると、今回学んできたことを直ぐに学生に還元することは難しいとは思うが、本学の図書館リニューアルには少しでも組み込んでいけたらと考えている。目標は10年後に入学する学生が古さを感じない図書館（学びの空間）を作ることである。アルト大学訪問時の説明スライドの1枚にもあったように、利用者ニーズが変化していることをしっかりと認識し、これまでの図書館の常識というものからポジティブな逸脱が必要であると考える。そして今回の研修を通して他大学の図書館員と話ができたことや、帰国後にも交流を続けられていることは非常に大きいものになっている。研修旅行中にあまりにも犬バカっぷりを発揮していたところ、東洋大学の方には学内者限定のセラピードッグイベントに呼んでいただき、人が集まる図書館の素晴らしい例を見せていただいた。明治大学の方には図書館見学で明治大学の考える空間の使い方を見せていただき、リニューアルの参考になる考え方のヒントを教えていただいた。今後もこの縁を大切に、これから図書館について一緒に考えていけたらと思う。



アアルト大学ハラルド・ヘルリンラーニングセンターでの説明スライドのうちの一枚。

写真は報告者撮影。

【参考資料】

地球の歩き方編集室. (2025). フィンランド 2026~27. 東京：地球の歩き方.

ARC国別情勢研究会. (2024). ARCレポート フィンランド 2024/25. 東京：ARC国別情勢研究会.

岩竹美加子. (2024). フィンランドの高校生が学んでいる人生を変える教養. 東京：青春出版社.

The Asahi shinbun SDGs ACTION!..”【SDGs達成度ランキング】日本、2025年は世界19位に後退 6目標が最低評価” <https://www.asahi.com/sdgs/article/15860623>, (アクセス日2025-11-19).

SDG TRANSFORMATION CENTER. “ Sustainable Development Report 2025”

<https://sdgtransformationcenter.org/reports/sustainable-development-report-2025>, (アクセス日2025-11-19).

グローバルノート株式会社. “GLOBAL NOTE.” <https://www.globalnote.jp/>, (アクセス日2025-11-19).

【別紙】

■訪問先一覧

	午前	午後
9/15 (月)	ヘルシンキ中央図書館【Oodi】	【Oodi】／アカデミア書店
9/16 (火)	フィンランド国立図書館	ヘルシンキ大学【KAISA HOUSE】 (中央図書館／ラーニングセンター 【Aleksandria】)
9/17 (水)	イソオメナ図書館	アルト大学 ハラルド・ヘルリンラーニングセンター
9/18 (木)	ニッスニク小中学校／マサラ図書館	キルッコヌンミ図書館【Fyyri】

■イソオメナ図書館



Reaging Dogとして活躍しているLady。18：30出勤。写真は報告者撮影。